

平良市「人・まち・自然の健康都市を目指す珊瑚礁保全」

こんにちは、沖縄県平良市の伊志嶺亮と申します。

イチローはメジャーを代表するトップバッターですが、彼がアメリカに行く前に平良市でキャンプを毎年2月にやっております。私もトップバッターでがんばってみたいと思っております。

健康都市づくりの事例として、「人・まち・自然の健康をめざす珊瑚礁保全」について紹介したいと思います。



平良市がどこにあるのか、ご存じない方も多いかと思うんですけども、この市川市からは南西の方向に1600キロくらいでしょうか、沖縄本島から300キロほど、台湾からも350キロほど離れておまして、緯度から言うと台湾の台北より少し南側になります。宮古諸島の中核都市ですが、人口は35000人、面積は65平方キロメートルです。主な産業は、農業と漁業と観光で、珊瑚礁に囲まれた亜熱帯の気候で、平均気温が23度というところです。このたび市町村合併で10月1日からは平良市がなくなって新たに宮古島市ということになります。



平良市の健康プロジェクトですが、このコンセプトは、人の健康、まちの健康、自然の健康です。もちろん人の健康は人の体と心の健康ですが、まちの健康は都市機能の健康だけではなく、コミュニティーの健康、それからコミュニティーを形成する最小の単位は家族ですが、その家族の健康、それから祭りなどがきちんと行われているかといったこともまちの健康になるかと思えます。平良市に西原という小さな集落があるんですけども、人口が600くらいの集落なんですけど、その子どもたちは朝学校に行くときに道草をくっていきます。それは、年寄りのうちにいって、「おばあちゃん行ってきます」といって挨拶をして学校に行くんです。これも一つの健康のまちづくりではないかと思っています。



本日紹介する珊瑚礁の保全は、人・まち・自然のうち、自然の健康という位置づけになるかと思えます。ここで、なぜ珊瑚礁保全が健康都市と関係あるのかということですが、WHO の健康という概念が、身体的・精神的・社会的、あるいはスピリチュアルというものがありますけども、宮古島は昔から土にも石にも岩礁にも神の魂が宿っているというような、そういう土地柄ですから、自然をこれまで大事にしてきました。しかし、開発がだんだん進んできて、ちょっとこれが危うくなってきたという感じが問題になっております。そして、後でお話しますが、観光で珊瑚礁の漁業等が危機に瀕している状況にあります。ですから、この珊瑚礁の保全と、珊瑚礁を利用した地域経済発展の視点から、珊瑚礁の保全は絶対していかなければならないという重要課題であります。

健康都市とサンゴ礁保全

- ひとの健康 ... 文化背景であるサンゴ礁（八重干瀬）の再評価
- まちの健康 ... 経済振興：漁場・観光資源の保全、観光振興
- 自然の健康 ... サンゴ礁の保全：具体的保全策と意識啓発

宮古島には国内で最大の珊瑚礁、八重干瀬（ヤビジ）と宮古の言葉で言うんですが、そういう珊瑚礁があります。大小 100 ほどの珊瑚礁が南北 10 キロ東西 7 キロの範囲に分布しておりまして、それぞれの珊瑚礁には、漁民がつけた愛称がついておりまして、昔から漁民に親しまれております。現在でも豊かな漁場として、漁師は毎日のように行っておりますし、われわれも大潮の時にはここに行って、ここで遊んだりしております。最近ではダイビングが盛んになりまして、宮古島には 5 万から 6 万人くらいのダイバーが来ますけれども、そのメッカでもあります。

国内最大のサンゴ礁群・八重干瀬（やびじ）

- 10×7 km、大小1000のサンゴ礁
- 豊かな生態系
- 民族伝承「柳田國男『海上の道』」
- 古くからの良好な漁場
- ダイビング・遊漁も盛ん

そして 20 年ほど前から八重干瀬を利用した観光上陸が行われております。大体は旧暦の 3 月 3 日、昔から宮古の女性たちは着飾って浜に行って、普段は外に出る機会のない女たちが、そこでいろんな出会いを楽しんだりするというような風習もありますし、また身を清めて海の恵みに感謝して潮が引いた浅瀬か

八重干瀬観光上陸

- 地元伝統行事を大型観光化
- サンゴ礁に約1時間上陸、自由散策
- 主催：フェリー2社＋旅行代理店多数
- 時期：毎年4月中旬3日間程度
- 動員観光客数：約3000人
- 宮古観光の一イベントに成長
- 経済効果2～3億円（関係者談）

- 上陸・自由散策に事実上規制なし。
- 観光客 予備知識なし。
- 観光業者による案内・説明なし。
- サンゴ踏みつぶし、生物採取によるサンゴ礁生態系の攪乱が懸念される。

ら魚介類を採ってみんなで神にそなえるという習慣がある島であります。現在では、信心が薄れまして、観光になりつつありますけど、これが現在のような上陸観光になったかといえますと、これは主にフェリー会社が主催して4月の3日間で3000人が珊瑚礁に上陸しております。観光の面からいうとこれも評価できるんですけども、事実上珊瑚を踏み潰したり、生物を採取したりすることに制限がないため、珊瑚礁の生態系が平成9年ごろから大変懸念されてきておりました。

観光と保全の両立の取り組みを行っているんですが、最初に直面した問題は、珊瑚礁を守るという国の法律がないということが一つ、それから正確な八重干瀬の地形図がなくて、調査をするにもちょっと調査が難しかったということもありまして、これを国土地理院に依頼しまして、珊瑚礁図も今は正確にできておりまして、名前も一つ一つきっちりと正確に記載されております。

観光と保全の両立への取り組み① H10C(1999)～

課題① 調査材料が足りない。
 * 八重干瀬の地形が不明
 * サンゴの生育状況が不明
 * 観光上陸の実態が不明

対応① 状況把握の努力
 * 国土地理院に地図作成依頼
 * 東海大と共同サンゴ礁調査
 * 現場視察・アンケート調査
 * 関係者聞き取り調査

結論①
 * 観光上陸を継続する余地はある。
 * しかも保全への配慮・対応は必要。

また、珊瑚礁の荒廃が懸念されるとはいえ、基礎的な情報がなくて、たとえば珊瑚礁が何年でどれくらい成長するのか、あるいは何種類の珊瑚礁が八重干瀬にあるのかということがあんまり良くわからなかったんですけど、東海大学との共同で、市の職員も調査に参加して、この状況の把握に努めてまいりました。この観光上陸は、市民の間でも大きな議論を呼びまして、賛成論・反対論が地元の新聞などにもいろいろ議論されましたけども、そうした状況の中で、なかなか行くなとも、踏み潰すなとも、そういうことができなかつたわけです。ですから市としましては珊瑚礁の保全と観光の両立を課題に地域全体で考えようという枠組み作りをやってまいりました。単なる賛成・反対論議にならないように、互いにしっかりと情報を交換しながら、市民に情報を提供しながら八重干瀬についての学習を進めてまいりました。

観光と保全の両立への取り組み② H13(2001)～

課題② 保全に必要な法令がない
 * サンゴ礁守る国の法律がない。
 * 県条例は漁業関連の範囲。
 * 市条例つくっても実効性期待できない。

対応② 地域で保全枠組みづくり
 * 市民ボランティア「サンゴ礁ガイド」養成・導入
 * 観光客の保全意識調査
 * 観光関係者へ保全働きかけ
 * 地域の関心向上と、保全ガイドライン策定

留意点
 * 単純な賛成・反対論議にならないよう配慮
 * 観光と保全の両立の模索を強調
 * 結論を押しつけないよう配慮

そして、市民ボランティアの珊瑚礁ガイドを養成するという事業をはじめました。観光客の多くは自然環境に興味がある方が来るわけで、好きで珊瑚礁を踏み潰しているわけではない、岩と珊瑚の区別がつかないだけのことが多いということで、アンケートなどからそういうことがわかりました

市民ボランティア「サンゴ礁ガイド」H13(2001)～

◆行政が観光現場に市民ボランティアを導入する理由
 * 八重干瀬の保全と観光の両立は地域の多面的課題。
 * 市民ガイドの養成は、島の環境を理解するための社会教育。
 * 環境保全と経済振興の両面に理解のある人材育成。

◆サンゴ礁ガイドの役割
 * 観光客にサンゴ礁の自然や文化を紹介する。
 * 観光客にサンゴ礁保全を呼びかける。
 * 観光客とガイド(宮古島住民)の地域交流。
 * 観光関係者の意識をサンゴ礁保全に向ける。

◆6年間で143名が受講、ガイドとして活躍。

ので、ガイドを導入して珊瑚礁の踏み潰しがしないような手立てを考えたというわけです。ボランティアを導入する理由は、もちろん八重干瀬の保全と観光の両立ですが、市民ガイドの養成は島の環境を市民にも理解してもらうという、一つの社会教育であるということがあります。環境の保全と経済振興の双方に理解のある人材育成にもつながっているのではないかと思います。一方で、ガイドの役割は観光客に珊瑚礁の自然や文化を解説して、珊瑚礁の保全を呼びかけると共に、観光客と共に珊瑚礁で過ごす時間を共有しながら、地域の交流を図って珊瑚礁にかかわる地元の民話を伝えたり、海にまつわる地元の歌を披露したりするといった人の交流がこれまでなされてきました。珊瑚礁ガイドの導入で珊瑚礁の踏み潰しや生物採取を少なくすることができて、観光の質も向上したかと思えます。

珊瑚礁の利用と保全の問題は、観光の当事者だけの課題ではなくて地域の課題であるとの認識が宮古では浸透してきております。単純な賛成・反対の議論も今はなくなりまして、環境に対するもっと広い視野での視点が市民の間に広がってきたのではないかと思います。平成 15 年には WHO の協力で、シンポジウム形式で観光利用と保全の課題について論議して、地域として保全のためのガイドラインの策定が必要であるとの認識を得て、行政・観光業者・漁民・市民の 9 つの組織で議論を重ねて、観光客が環境に配慮した観光を望んでいるという事実を踏まえて、生物採取を一切禁止する、珊瑚礁踏み潰しを極力減らすことを記したガイドラインも平成 16 年度にできております。内容は簡単なものですが、国に珊瑚礁保全の法がないことなどから、珊瑚礁の保全に関しては先進的な事例として、県や環境省などからも評価をいただいております。



まとめとこれからの展望ですけれども、以上紹介したことをまとめると、平良市は健康都市づくりの一環として、宮古島の住民の精神的風土の根底を支えてきた珊瑚礁の保全を進めているということ、ここでは市民参加が大きな役割を担っておりまして、市民が珊瑚礁ガイドとして活躍することで珊瑚礁の観光利用と保全について、建設的な議論をする環境が作られて、地域の中で課題としての認識も強まっています。ガイドラインも策定することができて、市民参加による環境保全と経済両立の試みとして、成功しつつあるのではないかと考えております。



今後の展望としては、ガイドラインの内容を充実して、策定にかかわる人・団体の拡大、対象とするエリアの拡大などを進めていきたいと考えております。特に飲料水や農業用水を地下水だけに頼っている島においては、森林や水環境の保全にもつなげていく必要があるかと思っております。保全と観光を両立するための体制をこれからも組織化して、人

的・金銭的な基盤の強化も検討していきたいと考えております。これが市民参加による地域づくりのモデルケースであるようにこれからもがんばっていきたいと考えております。ご清聴ありがとうございました。